

Toyota Municipal Museum of Art Press Release

豊田市美術館 プレスリリース

2025.7.7



Toyota
Municipal
Museum
of Art

豊田市美術館



山崎つる子《作品》 1963年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

© Estate of Tsuruko Yamazaki courtesy of LADS Gallery, Osaka and Take Ninagawa, Tokyo

アンチ・アクション 彼女たち、それぞれの応答と挑戦

Anti-Action: Artist Women's Challenges and Responses in Postwar Japan

2025年10月4日[土]—11月30日[日]

開館時間： 午前10時-午後5時30分（入場は午後5時まで）

休館日： 月曜日（10月13日、11月3日、24日開館）

主催： 豊田市美術館

共催： 朝日新聞社

学術協力： 中嶋泉（大阪大学大学院文学研究科准教授）

会場： 展示室6, 7, 8

観覧料：

	一 般	高校・大学生	中学生以下
当日窓口販売	1,500 円	1,000 円	無 料
オンライン販売	1,300 円	800 円	

* 前売券販売所、その他観覧料の減免や割引等については、当館ウェブサイトをご確認ください。

開催趣旨

なかじま いずみ
本展は、中嶋泉著『アンチ・アクションー日本戦後絵画と女性画家』（ブリュッケ、2019 年、第 42 回サントリー学芸賞受賞）で開示された視座をもとに、日本の近現代美術史の再解釈を試みる企画です。

第二次世界大戦敗戦後の 1950 年代から 60 年代にかけて、日本では短期間ではあるものの女性作家が前衛美術の領域で大きな注目を集めました。その後押しをしたのが、欧米を中心に隆盛し、フランスを経由して流入した芸術運動「アンフォルメル（非定形）」と、それに応じる批評家たちの言葉です。ところが、ほどなくして熱は冷め、アンフォルメル運動が一時的な「旋風」に過ぎなかったという反省とともに、「アクション・ペインティング」という様式概念がアメリカから導入されると、女性作家たちは如実に批評対象から外されていくことになります。豪快さや力強さといった、男性性と親密な「アクション」の概念に、中原佑介や東野芳明といった、その後の美術史を形作ることになる男性批評家たちが反応し、伝統的なジェンダー秩序の揺り戻しが生じたのです。

こうした経緯を分析したうえで、中嶋氏が女性作家たちの「アクション」への対抗意識を指して創案したのが、本展タイトルにある「アンチ・アクション」という印象的な言葉です。

本展では、ジェンダー研究の観点から美術史の読み直しを図る「アンチ・アクション」の概念を足がかりに、草間彌生、田中敦子、福島秀子をはじめとした 14 名の女性作家による作品およそ 120 点を紹介します。

ぜひこの機会に、彼女たち、それぞれのアクションへの応答と独自の挑戦の軌跡にご注目ください。

出品作家

あかな まどころ えのもと えみ
赤穴桂子（1924-98）、芥川（間所）紗織（1924-66）、榎本和子（1930-）、江見絹子（1923-2015）
しらが ただ
草間彌生（1929-）、白髪富士子（1928-2015）、多田美波（1924-2014）、田中敦子（1932-2005）
たづこ
田中田鶴子（1913-2015）、田部光子（1933-2024）、福島秀子（1927-1997）、
宮脇愛子（1929-2014）、毛利真美（1926-2022）、山崎つる子（1925-2019）

展示点数

約 120 点

作家・展示紹介

本展で紹介する作家たちは、いくつかの共通する関心や指向をもちながら、その問題に対して、個々人が独自のアプローチを試みました。展示では、そのいくつかの関心事を導きとして、各作家の作品を有機的に結びつけながら、その独自性を浮かび上がらせています。

1) 形の由来と身体性

初期には、円を制作の手がかりにしながらも、後年には画面から形象自体を消失させた**田中田鶴子**。女シリーズや神話シリーズにおける明快な人体像を経て、ニューヨーク留学後には切り詰めた形態による抽象画に至った**芥川（間所）紗織**。女性の身体を示唆する絵画から出発し、それをさらに強度のある絵具の痕跡と絵筆の動きを留めた画面へと展開させた**毛利眞美**。建造物を下敷きにしたと思われる幾何学抽象と同時に、フロッタージュなどシュルレアリスムの技法を用いた抽象画も手がけた**榎本和子**。「捺す」という独自の技法を用い、私たちを凝視する目玉や簡略化された人体を画面に折り込んだ**福島秀子**。

それぞれの作家が、ときに身体を手がかりにしながら、抽象形態に向き合っていたことがわかります。



芥川（間所）紗織
《黒と茶》1962年
東京国立近代美術館蔵



毛利眞美
《裸婦（B）》1957年
東京国立近代美術館蔵



福島秀子
《無題》
1956年 東京国立近代美術館蔵

2) 素材と物質、表面の操作

1950年代には、パレットナイフで絵具を叩きつけるようにして堅牢な画面を作りあげ、その後、60年代には薄く絵具の層を重ねることで、透き通った色彩と材質とを画面に顕在化させた**江見絹子**。ガラスや亀裂を走らせた板など強度のある素材を用い、人間を超越した力の象徴を表現した**白髪富士子**。新素材の合成樹脂塗料を用いた艶やかな表面により、軽快で明白な日常世界へと絵画を解き放った**田中敦子**や**山崎つる子**。急速な都市化の産物であり、卑近な素材であったアスファルトを画面に荒々しく貼り付けた**田部光子**。濃淡を効かせた絵具や皺の寄った布や紙の断片などを画面に張り込み、周囲の空間との間に対比を作り出した**赤穴桂子**。熱によって形を変形させることのできるアクリル

作家・展示紹介

や観客の姿を反射するアルミニウムといった素材を用い、平面から立体へと作品を展開した**多田美波**。

作家たちは、自身の思考を体現＝代弁するに最適な素材や技法を独自に探究しました。



田中敦子
《地獄門》1965-69年
国立国際美術館蔵



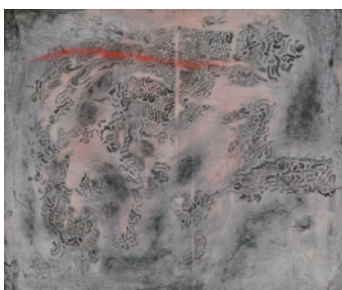
山崎つる子
《作品》1964年
芦屋市立美術博物館蔵



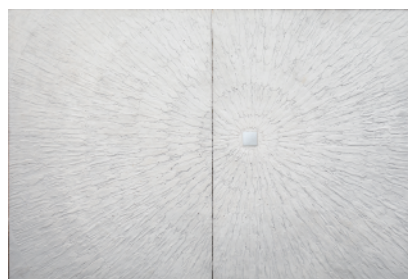
田部光子
《繁殖する(1)》1958-88年
福岡市美術館蔵

3) 反復する身体・反復する形象

「描く」ことに疑問を抱き、「捺す」ことで形象を定着させた**福島秀子**。速度や衝動を抑制しながら繰り返される無数の円の刻印は、画面に別の時間と空間を生じさせます。同じく大小の円を画面に偏在させ、それらを無数の線でネットワーク的につないでみせる**田中敦子**。1960年頃から大理石粉を混ぜた絵具を繰り返し画面に垂らすことで制御された作品を構築した**宮脇愛子**。細かな網の目が全体を覆う**草間彌生**の「インフィニティ・ネット」では、絵具の濃淡によって画面は揺れ動き、独自の空間が立ち上がっています。反復による制作は、そこに含まれる小さな差異によって豊かな空間を作り出し、また見る人に、作品と向き合うなかで生成される独特の手触りを実感させます。



草間彌生
《Pacific Ocean》1959年
作家蔵



宮脇愛子
《作品》1964年
公益財団法人アルカンシエール美術財団／原美術館コレクション

展覧会の見どころ 1) 最新のジェンダー研究に基づく美術史の見直し

近年、女性作家の再評価が様々に進められるなか、本展では『アンチ・アクション—日本戦後絵画と女性画家』（ブリュッケ、2019年、第42回サントリー学芸賞受賞）で、ジェンダーの観点から日本の戦後美術史に新たな知見をもたらした中嶋泉氏の全面的な協力により、新たな目で各作家の作品に光を当てます。

図録には、同研究の第一人者であるイギリスの美術史家グリゼルダ・ポロック氏のインタビュー記事も収載します。

2) 未発表作品の紹介

ご遺族や研究所の全面的な協力を得て、赤穴桂子、多田美波、宮脇愛子らの、これまでに紹介される機会のなかった初期作品や未発表作品を展示します。作家たちの新たな一面を知る機会になります。

3) ZINEの配布

図録テキストやパネル解説とは別に、様々なトピックを紹介するZINEを会場で配布。よりカジュアルに、より多面的に、作家たちの活動や時代背景などを知ることができます。

4) 草間彌生《椅子》の展示

豊田会場のみ、草間彌生の代名詞といえるソフトスカルプチュア作品《椅子》を展示します。

関連イベント

記念講演会

講師：中嶋泉氏（本展学術協力、大阪大学大学院文学研究科准教授）

日時：2025年10月26日（日）午後2時～

会場：美術館講堂

定員：150名（先着）、聴講無料

*その他のイベントにつきましては、詳細が決まり次第、当館ウェブサイト、SNS等でお知らせいたします。

巡回情報

東京国立近代美術館 2025年12月16日～2026年2月8日

兵庫県立美術館 2026年2月28日～5月6日

お問合せ

豊田市美術館 〒471-0034 愛知県豊田市小坂本町8丁目5番地1

HP:<https://www.museum.toyota.aichi.jp> e-mail:bijutsukan1@city.toyota.aichi.jp

●展覧会に関すること 学芸担当：千葉、鈴木

Tel 0565-34-3131

●掲載依頼・取材等に関すること 広報担当：西本、籠谷（こもりや）

Tel 0565-34-6748

「アンチ・アクション 彼女たち、それぞれの応答と挑戦」 広報用画像について

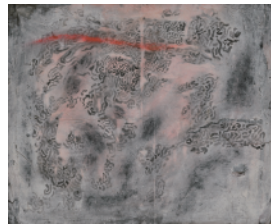
当館ウェブサイト「広報用画像ダウンロード」申込みフォームより、ご希望の画像を申請してください。
「広報用画像ダウンロード」の画像提供サービスは、パソコンでのみダウンロード可能となります。
パソコンからのお申し込みが難しい方は、以下を記入のうえ、Fax(0565-36-5103)でお送りください。

お名前	様	ご所属
Tel		Fax
e-mail	必要な画像の番号	
掲載紙／メディア名	発売、放送予定日	月 日(月号、vol.)
必要な鑑賞券枚数(最大5組10名分)	枚	鑑賞券の送付先

* 読者プレゼントのため等、希望する場合のみご記入ください



1



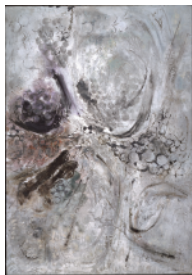
2



3



4



5



6



7



8

1. 芥川（間所）紗織 《黒と茶》1962 年 東京国立近代美術館蔵
2. 草間彌生《Pacific Ocean》1959 年 作家蔵 ©YAYOI KUSAMA
3. 田中敦子《地獄門》1965-69 年 国立国際美術館蔵 ©Kanayama Akira and Tanaka Atsuko Association
4. 田部光子《繁殖する（1）》1958-88 年 福岡市美術館蔵
5. 福島秀子《ホワイトノイズ》1959 年 栃木県立美術館蔵
6. 宮脇愛子《作品》1964 年 公益財団法人アルカンシエール美術財団蔵／原美術館コレクション
7. 毛利眞美《裸婦（B）》1957 年 東京国立近代美術館蔵
8. 山崎つる子《作品》1963 年 兵庫県立美術館蔵（山村コレクション）

© Estate of Tsuruko Yamazaki courtesy of LADS Gallery, Osaka and Take Ninagawa, Tokyo

資料の使用には以下の点にご注意ください。

- ・作品写真のトリミング、文字のせはご遠慮いただき、所蔵先、クレジットも表示してください。
- ・ご紹介いただく場合は、情報確認のためお手数ですがゲラ刷り等をお送りください。
- ・情報掲載後、献本または情報公開後の報告をお願いします。
- ・本展の紹介でのご使用後は、各メディアの責任のもと画像データを削除破棄してください。

美術館使用欄 画像提供の依頼日 年 月 日 ☐画像送付 ☐校正 ☐修正 ☐配信・配本